

# いずみのひろば

2023年4月号

日本基督教団聖公会

NO.531 教会学校



いつか来る、主の曰、その曰は。。。 マラキ書3章19-24節

旧約聖書の最後の巻であるマラキ書には、ちよつと、おそろしいことが書いてあります。

「いつか、主の曰が来る。それは炉のように燃える曰だ。」

炉の中で火が燃えるように、神さまの怒りが燃える曰が来る。それはさばきの曰です。

このマラキ書が書かれた時代、イスラエルの人たちは、心をこめて礼拝をささげなかったり、汚れたり、傷ついたりした動物を、神さまにささげたりしていたそうです。

だから、神さまは怒って、こんなおそろしいことを言われたのです。

神さまは、とても正しく潔い方です。悪いこと、間違っていることを、そのままにはされません。

悪いこと、間違っていることをした人は、かならず神さまの罰を受けます。

でも、その一方で、神さまは、わたしたちのことを、とても愛しています。

愛しているから、本当は罰を与えたくない、罰を与えなくてもいいような、いい字でいてほしいな、と

いつも願っておられます。みんなは、いい字でいられるかな？ 罰を受けない自信はあるかな？

わたしは、、、ありません。きっと、みんなも同じじゃないかな？

そんなわたしたちを見て、神さまはあることを決めたのです。

イエスさまをこの世に送って、十字架にかけよう。それをみんなの罰の代わりにしよう。

マラキ書が書かれてから、430年ぐらいたって、イエスさまが馬小屋で生まれました。

マラキ書には、次のようにも書かれています。

「わたしの名前をおそれる人には、義の太陽がのぼる。その翼にはいやす方がある。」

いつかさばきの曰が来るけれど、イエスさまを信じる人は、大丈夫だよ、ってことです。

イエスさまが、わたしのかわりに苦しんで、罰を受けてくださったからです。

いつか来る主の曰は、おそろしい曰ではなく、よろこびの曰、希望の曰です。（小林素子）